フィロソフィーを重視したM&Aで「幸せな会社」づくりを追求する

コロナ禍を契機に、これまで以上に企業の存続をはかるためのM&Aに注目が集まっている。そこで、今号では㈱オーナーズブレイン代表取締役の小泉大輔氏に、現在の取り組みとM&Aにかける思いについて語ってもらった。

小泉大輔 こいずみ・だいすけ
株式会社オーナーズブレイン
代表取締役

1993年上智大学経済学部卒業。95年朝日監査法人（現在:あずさ監査法人）入社（アーサーアンダーセン直轄部門に配属）公認会計士登録。2002年新日本監査法人入社。03年に会計・税務のコンサルティングを手掛ける㈱オーナーズブレインを設立し、代表取締役に就任。

M&Aとフィロソフィー

私は大手監査法人に在籍していた頃からM&Aに携わってきました。現在も㈱オーナーズブレインの代表としてM&A関連の案件に取り組んでいます。

当社にご依頼をいただくM&A案件の多くは、デューデリジェンス、事業価値・株価算定です。とくにデューデリジェンスについては、通常の財務デューデリジェンスに加え、ご要望に応じて人材や組織風土・企業文化など「見えない非財務項目」についても調査・報告するようにしています。

こうしたアドバイザリー業務の行う場合に意識しているのは、そのM&Aが部分最適でなく、全体最適を目指すということ、そして買い手と売り手がおたがいにWin-Winの関係を築けるかどうかということです。その判断にはさまざまな知識やノウハウが必要になるため、ときにはプロジェクトチームに他社の専門家などにも参加してもらい、つねに最高のチームでアドバイザリーとしての支援ができるようにしています。

また、M&Aにおいては無意識のうちにおたがいの真意や情報を隠れてしまうことがあるので、それを発見し、開示するように促すのも私たちの役割だと思っています。そうやって、売り手と買い手がたがいの企業文化に共感し、企業理念を共有できるような状態をつくれるかどうかが肝心なのです。私は稲盛和夫さんが塾長を務められた「盛和塾」に15年以上在籍し、現在も稲盛経営哲学（フィロソフィー）を学びつづけていますが、そこでもやはりM&Aにおいては、その目的と意義を明確にするとともに、相手のことを尊重し、理解し合うことが大切だ、とされています。

日本において、こういった視点でM&Aアドバイザリーに取り組んでいるコンサルタントはまだまだ少ないかもしれません。かくいう私も、大手監査法人に在籍し、公認会計士という肩書にとらわれすぎていた時期がありました。そんなとき、私を目覚めさせてくれたのは、上場を目指していたある経営者からのひと言でした。「会社を買収するのがはじめてなので、ぜひ、相談に乗ってほしい」と依頼された私は、専門的なアドバイスを行うことでいい気になっていたのですが、あるとき、その経営者から「そんなことはどうでもいいから、俺を弟だと思って相談に乗ってほしい」といわれてしまったのです。その瞬間、私は知識だけで課題解決に臨んでしまったことを反省し、「今後はより深く、会社や経営者と向き合い、経営や財務以外の事柄にも注意を払うようにしよう」と決意したのです。もちろん、その決意は今もシッカリと私の胸に刻み込まれています。

M&Aで「幸せな会社」をつくる

ここ最近、私は「働く人が幸せになれる会社」のあり方に関心があり、この10数年で世界約60カ国を巡って「幸せな会社」をリサーチし、さまざまなメディアを通してそれらの情報を発信しつづけてきました。そして、そのなかで「幸せな会社」の多くは高い透明性と安心・安全な環境、社員一人ひとりが仕事を自分事として捉えるオーナーシップ・カルチャーを有しているということがわかってきました。

これらの条件はM&Aを成功に導くポイントと通じるところがあります。つまり、経営者の考え方しだいで、M&Aは「幸せな会社」をつくる絶好のチャンスになり得ます。その確信を胸に、これからもM&Aを通じた「幸せな会社」づくりを推進していきたいと思います。

※本コーナーはウェブメディア「M&Aコンサルタントの履歴書」（https://manda.careers）とのコラボ企画です。より多くのコンテンツをご覧になりたい方はぜひアクセスしてみてください。